

照葉樹林文化の基盤をなす自然環境 (第2報)

南川 幸

Natural Environment Forming the Basis of 'Laurel Forest Culture' (II)

Miyuki MINAMIKAWA

はじめに

近年、日本文化の起源に関する研究がいろいろの角度から論じられているが、その一つに照葉樹林文化論(1966)がある。これは他の民族文化の中核をなすものとしての日本語の成立と日本文化を構成する諸特徴の形成等という民族学的な文化起源論にあるのに対し、それぞれの気候風土のもとで生活する民族の衣食住の様式、伝承等の民族学的な傾向、特徴などの生活文化的、或は生活科学的に多くの共通の文化要素が認められることに着目し、所詮、各民族はそれぞれの気候風土のもとで自然に適応して、同じ自然環境のもとで生育する植物、生息する動物など自然の恵みを受け、また、人口増加に伴い適季適作的に作物を栽培し、家畜を飼育して生活を維持し、そのなかでそれぞれ特有の豊かな文化の華を咲かせてきた。すなわち、夏雨型(Summer rain type)の湿潤暖温帯(moist warm-temperate district)のうち、とくに東部アジアからヒマラヤの山麓にわたって分布する植物の体表をおおう表皮細胞、または上皮細胞が外表面にむかって物質を分泌してつくる模様構造をもち、機械的と植物体を保護し内部からの水の蒸発を防ぎ、外部からの物質の侵入を調節するクチクラ(cuticle)組織が発達して葉の表面に光沢があることより照葉樹といわれる常緑広葉樹の生育する地域であることより照葉樹林帯(laurel forest zone・独:Lorbeerwald zone)と称する地域に居住する各民族間に共通する文化を照葉樹林文化とよんでいるように考えられる。

これらの照葉樹林文化に関する調査研究が、最近になり大学の付属研究施設などが中心となって進められている。本学の生活科学研究所においては、矢作川・飛騨川などの水系単位で、或は北設楽など地方単位での生活科学的調査研究を推進、或はタイ国における海外調査などにおいて早くよりこの概念に近い内容の調査を実施し、その成果を広く公刊してきた。とくに多大の成果と評価を受けた海外調査に続いて、1980年以来、照葉樹林文化について調査研究が推進されてきた。すなわち照葉樹林帯域に属する中国の雲南・貴州・福建などの各省、韓国の済州島・台湾などをはじめ、国内における照葉樹林帯域に属する西南日本各地における衣食住に関する調査およびその基盤となっている自然環境などについて基礎調査を進めてきた。特に原始的文化の名残りを比較的よくとどめているといわれる照葉樹林帯域における少数民族といわれる人々の生活域を中心に文化生態学的な視点から調査が進められてきた。

我々は今年度これらの照葉樹林文化域の中央域に位置する中国について、その地域に居住する各民族の生活基盤をなしている自然環境、なかんずく照葉樹林が自然公園的緑地僧侶修業の

道場の環境として広大な境内自然林地に温存されている (中国科学院・植物園専門官) といわゆる長江 (揚子江・Changjiang) から東海 (東中国海・Donghai) に至る間の安徽省 (Anhui) ・江西省 (Jiangxi) ・浙江省 (Zhejiang), 一部福建省 (Fujian) の各省の沿海域から標高1,800~2,000mまでの地域の現存植生 (actual vegetation) を概観すると共に, 自然植生 (natural vegetation) の温存されている地方の森林植生について調査を行った。ここに中国における照葉樹林を構成すると推定される優占樹種 (dominant tree) の生態及び形態の概要について記述をする。

1. 中国照葉樹林の優占樹種の推定

暖温帯に成立する照葉樹林帯は温量指数 (warmth index) が85~180m・dの間に成立する (吉良・1945) する照葉樹林であるが, すでに述べた (同紀要35号・家政・自然・1990) 植物地理学 (phytogeography) における日華区系 (Sino-Japanese Region) における標徴種 (Characteristic species) の代表種であるアラカシをはじめとするブナ科 (Fagaceae) の照葉樹をはじめ, クスノキ科 (Lauraceae), 特色あるトベラ科 (pittosporaceae), ヤマモガシ科 (Proteaceae) など中国照葉樹林帯の優占樹種の数種につき今回は述べ, 逐次現地調査・標本などにより得た樹種について記述し, 照葉樹林帯を構成する中国本来の自然植生解明への資料にしようとするものである。

青岡栎 *Quercus glauca* Thunberg アラカシ ブナ科

本樹種は今回の調査においては山東半島付近から安徽・浙江・江西, 一部福建の調査地域では日華区系の代表樹種であることより当然であるが, 何れの寺院境内の自然植生においても分布生育している種であり, やや乾燥立地においてはアラカシ優占群落が形成している。なかでも西湖西岸の北高峰の麓にある靈隠寺の寺叢内をはじめ周縁に数多くの自然植生の巨樹が温存され, さらに付近の山中 (標高300~310m) にある飛来峰一帯の石灰山地にはアラカシを優占種とした自然植生が保護生育している。中国では成木になると樹高16~18m, 胸高幹周 (1.3mの高さにおける) 約190cmにも生長している。樹皮は灰黒緑色で色目やや小さくて浅い割れ目が多くざらざらし, 葉は長さ6~13cmで, 長楕円形, 若葉には毛がみられるが, すぐに落ち無毛となる。本種は中国南部へと分布している。

Q. acuta Thunberg アカガシ ブナ科

このカシも同様な地方に分布するが, 本樹種は樹高16~20m近くに真直にのび, 胸高幹周は200~220cmに生長を遂げるなどよく伸長している。特に寺叢の樹林内の少しく段状地形に巨木が多い傾向を示している。葉身は長楕円形, または楕円形で, 葉の先は鋭尖頭, 茎部はくさび形を呈し, 葉は主脈の左右やや不相称で, 表面は深緑色を呈し, 茎部は広いくさび形を呈している。すでに花期 (6月) がすぎ, 晩生花がわずかにみられるのみであったが, 雄花序は新枝の下部に数個つき, 長さ5~12cmで下垂し, 雌花序は新枝の上部の葉えきに直立し, 長さ1.5~2.3cmで褐軟毛を密生し, 5~6個の花を穂状に着花している。また, 記念公園一帯にも多くみられる。

赤皮青岡 *Q. gilva* Blume イチイガシ ブナ科

中国では同分布域の記念公園や寺叢に多く植栽されているカシ類で, 成木では樹高15~20mほどであるが, 巨樹指定木では28m, 胸高幹周450cmにも生長した個体が見られる。

このカシ類は樹皮は灰黒褐色で, 幹肌は薄片となり剥皮している。葉身は広倒披針形で, 先端は急に鋭尖出し, 茎部は鋭形で, 葉片の上部に鋭鋸歯があり, 6~13cmである。特に葉面には初期に星状毛を密生しており, 茎部は鈍形, 葉片の上部に鋭鋸歯をもち, 6~13cmほどある。特徴として発葉初期には星状毛を葉面に密生している。花期は4月中旬~5月中旬ということ

である(植物園専門職)。雄花序は若枝の下部に数個つき、長さ6-15cmほどで下垂する。雌花序は新しい枝の上部の葉えきに数個つき直立し、長さ1cm内外で、星状毛を有している。

青栲・細葉青岡 *Q. myrsinaefolia* Blume シラカシ ブナ科

青栲は枝下の高いカシ類で、中国の中南部の照葉樹林に生育し、寺叢のやや疎開した林内照度の高い部分、或は林縁に巨木となって温存されている。青栲はカシ類のうちで最も耐寒性の大きな樹種で河南・山北・山東の丘陵山地にも生育しているという報告がある。これらの地域の自然公園様の記念園や寺叢の自然植生温存地域には樹高21m、胸高幹周3m近いシラカシの巨樹が生育しているのをかなり多く確認することができた。

このカシは樹皮は灰黒色で皮目は縦にならび、若枝は淡黄褐色の軟毛を散生するが、すぐ落ち、紫黒色、または暗緑色で無毛、皮目を散生する。葉は互生、長柄があり、狭長楕円形、鋭尖頭、基部はくさび形、または広いくさび形、1/3以上は鋭鋸齒縁、革質、表面光沢があり、無毛、葉外は長さ8-15cm、葉柄は長さ12-22mmほどであり、花期(5月)後の残花個体を観察すると尾状花序は前年枝の葉えきからでる短枝に、または新枝の下部に数個つき、下垂し、長さ6-11cmほどで、褐色の軟毛を密布している。

中国ではこの材を器具・機械の用材とし、その他建築用、楽器にも用いるということである。

柯樹 *Castanopsis cuspidata* (Thunberg) Schottky コジイ ブナ科

中国の中南部の自然植生の温存林にみられるシイ類で、樹皮は巨樹に生長した個体でも支幹の下や株元に少しく割れ目がある程度で平滑で、幹は最大木で23m余、胸高幹周5m近い巨樹に生長を遂げた個体となっている。葉は2列生、互生で、有柄、葉身は広披針形または楕円状卵形で、鋭尖頭、鈍端、基部は広いくさび形をなし、葉縁は中部以上に鈍鋸齒がある。葉裏はあか状の毛をもち、はじめは銀白色後灰褐色になる。

分布は中国南部・台湾・琉球・九州・四国・本州(関東以西)であり、照葉樹林の代表種の一つである。

網脉山龙眼 *Helicia cochinchinensis* Lour. ヤマモガシ ヤマモガシ科

中国の南部から中部にかけて分布する常緑高木で、ほとんどの個体は真直に伸び、胸高幹周が2.3mほど程度まで太くなる個体を温存されるが、概して成木でも9-12m位のものが多いようである。葉は互生で、枝に概して等間隔につき、皮針形が主で、一部倒卵状だ円形を呈し6-11cm、葉底はくさび形で、葉柄に流れるものがある。やや波状、全縁、または上半部に疎微鋸齒がある。花(7-8月が開花期)は早咲きの個体によると葉脈より長さ10-13cmほどの総状花序を出し、白色花を多数つけている。がく片は4個、線形、上半部は外側へ旋回し、雄ずいは旋回部の中程につき花糸なく、線形のヤクのみとなっている。

この *Helicia* 属は主に南半球の乾燥地帯を生育圏としている。*Helicia* はらせんの意味で、花のガク片がねじれている特徴による。*Cochinchinensis* はラオス地方の地名による。

石栎(浙江) *Pasania glabra* (Thunb.) Oerst. シリブカガシ ブナ科

中国では中南部の暖帯から亜熱帯に分布する照葉樹で、巨木と称する個体になると樹高15mほどに伸長しているが、大体10-13mの個体が多い。幹は真直せず多く枝分れし、樹皮は灰黒色で、平滑、葉は比較のおそく5月中旬に発葉し、互生で、有柄、葉身は倒披針状長楕円形で、短く鋭尖頭、鈍端、基部は広いくさび形で、全縁または上部に1-2の波状鋸齒がある。

中国では櫓や小さいものでは農具の柄などに用いているようであり、種子は食用に供されているようである。種名は種子の下面のくぼみに由来し、*glabra* は無毛の意味である。

紅 楠 *Persea Thunbergii* (sieb. et Zucc.) Kostermans タブノキ クスノキ科

中国の広東省付近から福建・江西・浙江・安徽・江蘇・山東半島あたりまで分布しているクスノキ科の常緑高木で、浙江・福建省あたりの沿海地方では樹高14~16mほどに伸長し、胸高幹周も3.2mの巨木にも生長した個体はかなり多く確認された。

樹皮は一般に暗褐色に灰白色のしまがあり、平滑であるが巨樹では部分的に赤味が加わっている。花(5月上~中旬)の残花の形態をみると、中国の個体は総花軸は20~23cmと大きく、淡黄緑色で花径は約0.8~1.2cm、花被片は6個で3個ずつ2輪配列となり、内側のものがやや大きい。

崖花海桐 *Pittosporum illicioides* Makino コヤスノキ トベラ科

中国の中南部沿海地方を主に生育する樹高3m前後の照葉樹であるが、寺叢によっては5m余に生長した老樹もみられる。葉は互生で、短柄があり、長楕円形で、鋭尖頭、鋭端、基部はくさび形を呈し、全縁・無毛で、葉身は長さ5~15cm、葉柄は5~15cmである。花期(5月上・中旬)を過ぎてはいたが、残花の形態をみると花序は集散花序の軸が短くなって散状に2~12花をつけ、そのうち1つの軸がのび苞をつける花をつけている。秋になると径10~12mmほどの球形の果実に熟するようである。

白 楠 *Neolitsea sericea* (Bl.) Koidzumi シロダモ クスノキ科

中国の照葉樹林帯に属する省の沿海地から丘陵にかけて生育する樹高13~16mほどの照葉樹で、成熟樹にあっては胸高幹周160cmにもなり、樹皮は灰黒色で、割れず、円すい小さい皮目が多く、小枝は緑色で円く。葉は互生で有柄、葉身は革質で長楕形または楕円形、鋭尖頭または、鋭頭、基部はくさび形、全縁で長さ7~20cmほどである。

中国では諸器具材として多くは用いられているが、太い材は寺院をはじめの建築材ともされているようである。

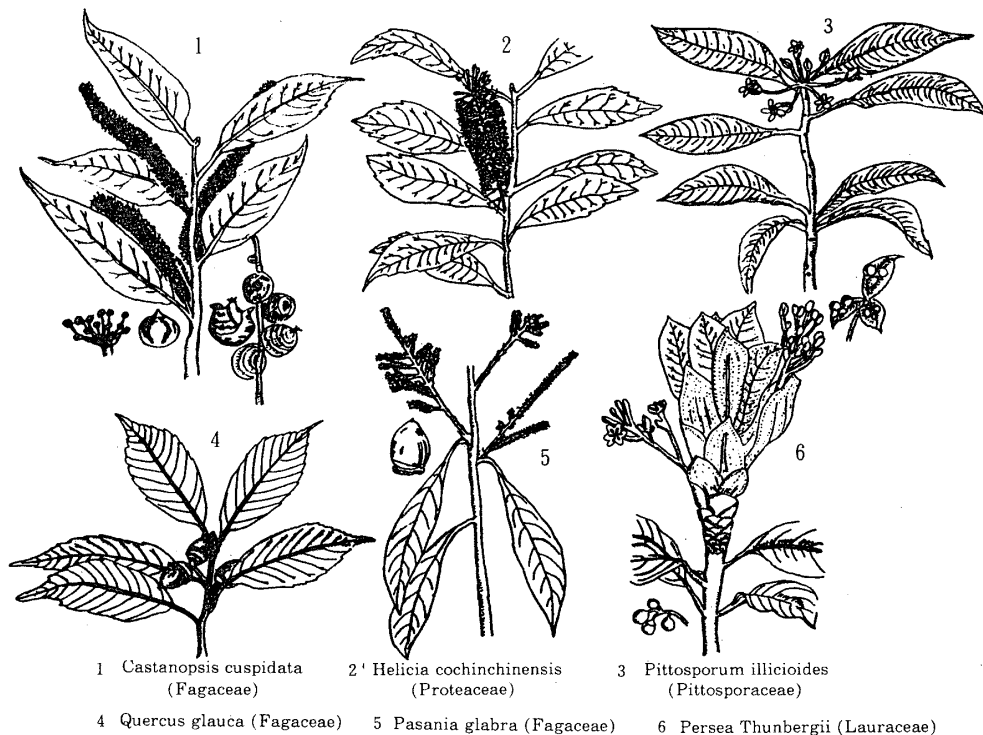


図1. 中国照葉樹林帯を構成している主要樹木の形態図

Fig.1 The picture of forms of the main species which constitute laurel forest zone

その他数10種にわたる照葉樹林帯の構成樹について現地調査・標本による植物形態などについて調査研究を行ったが、そのうち今回は優占樹種の数種をあげて記載を行った。これらの得た知見を基礎に中国における照葉樹林の構成・群落生態・植生について中国の研究者との現地調査により調査を進める計画である。

ま と め

照葉樹林帯という東アジアの暖温帯を東西に貫く、植物生態学領域における民族文化を照葉樹林文化と呼んでいる。

これらの基盤となっている植物共同体(phytocoenosis)の実態を把握することが重要課題の一つである。

今回は中国の現状として、照葉樹林の自然植生、或は照葉樹林の構成優占樹木が、自然公園的緑地、修業の道場環境として広大な自然林地に温存されているといわれる地域の沿海域から標高1,800~2,000mについて樹木生態学的な調査結果の一部をここに報告した次第である。

これらの照葉樹林帯を構成している優占樹種など自然環境要素に関する基本調査資料が、本研究所の取り組んでいる照葉樹林文化の調査解明の基盤の一端になれば幸いである。各種の資料を提供された調査各省植物園の植物研究者、師範大学の研究者、滋賀県琵琶湖研究所長吉良博士、本学短期大学部学長広博士および小野所長をはじめ、平野教授ならびに加藤主任、大森副手などの諸氏に対し深甚な謝意を表す次第である。

SUMMARY

The laurel forest zone runs through the warm-temperate region of East Asia, from east to west. Ethnic culture of the region is called the laurel forest culture from the viewpoint of plant ecology.

It is one of the important theses for us to know actual conditions plantocoenosis, which is the foundation of such ethnic culture.

This time, we made a field survey of the laurel forest zone of China where natural vegetation still survives, and investigated the plant-ecological conditions of the dominant species.

The dominant species in the laurel forest zone of China consist of the genus *Quercus Glauca* — the characteristic genus of Sino-Japanese Region, the genus *Fagaceae*, the genus *Lauraceae*, etc.

The result of our ecological investigation has been reported.

参 考 文 献

1. 中国科学院編輯委員会：中国植物誌，31~46巻，1987.
2. 中国林業部林業区画弁公室編：中国林業区画，1987.
3. 吉良竜夫：寒地農学，2. 1945.
4. 上山春平：照葉樹林文化，日本文化の深層，中公新書，1969.
5. 南川 幸：照葉樹林文化の基盤をなす自然環境，I，名古屋女子大学紀要，36，家政・自然，1990.
6. ——：中部地方に発達する照葉樹林帯の植生，日本生物地理学会報，44，1989.
7. ——：東海地方の照葉樹林文化を支える植生と植物相（紀伊半島東部地方）日本芝草学会報，23，1990.
8. ——：中国における照葉樹林の分布と主要構成樹木類，森林文化誌，1990.



図2. 寺叢として残されている照葉樹林の断片

Fig.2 A fragment of the laurel forest preserved as a temple forest

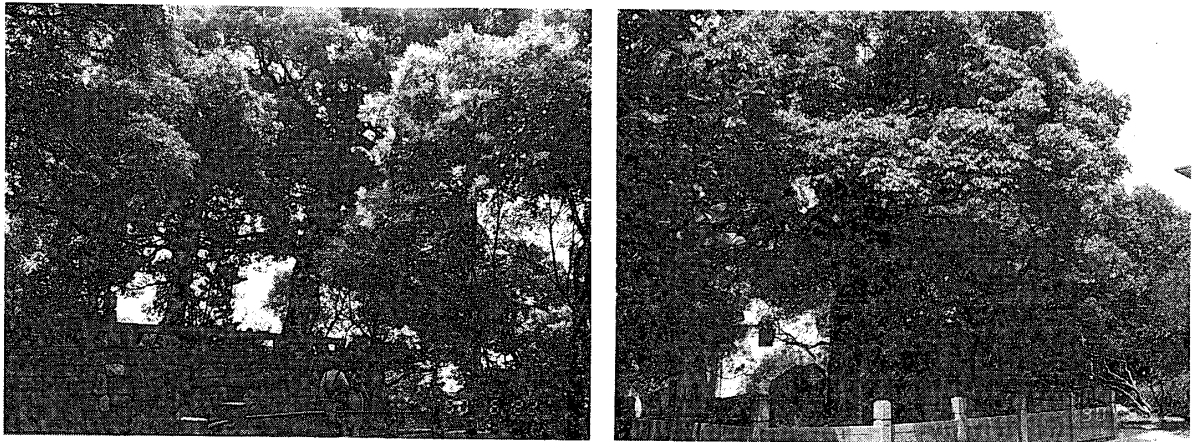


図3. 往時の面影をよく残し老樹茂る公園

Fig.3 The site of a park, with old trees thick of leaves, giving some idea of its former condition



図4. 巨木の繁茂する寺叢の自然植生種アラカシなどの巨木
Fig.4 Giant trees of the genus *Quercus Glauca*, the dominant species of the natural vegetation still seen in the approach to the tombs of a temple



図5. 照葉樹林の内部
Fig.5 The inner aspect of a laurel forest